

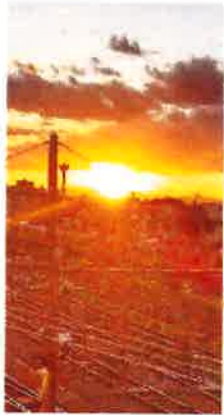
夕陽は東京名所描写

文人の
武蔵野

太宰治(1909〜48年)は、人間の強さと弱さに敏感な作家でしたが、土地の名前のブランド力にも敏感でした。自伝的小説「東京八景」(昭和16年)においても、弱さを自覚する「私」が自身を鼓舞する景色として「武蔵野の夕陽」をとりあげ、銀座などを斥けて東京名所の第一景に押し上げようとしています。

太宰の文学が特に対象にしたのは、富士と津軽と東京でした。「富嶽百景」(昭和14年)においても、「津軽」(昭

太宰治 ③



三鷹市内から望む夕陽

和19年)においても、記号としての地名に新たな価値を付与しようとしています。それは先人たちの風景表象が立ち上げた名所ブランドに挑み、上書きしようとする文学上の勝負でもありました。

小説「東京八景」で「毎日、武蔵野の夕陽は、大きい。ぶるぶる煮えたきつて落ちてゐる」と描写された「武蔵野の夕陽」は、「三鷹町」の「家」の「三畳間」から見える「夕陽」です。三鷹の夕陽ではな

く、かと言って実在の武蔵野町(武蔵野村の後身で武蔵野市の前身)の夕陽でもないことに注意したいと思います。

東京八景は、特定地域の絶景を八つ選んで評価する中国起源の様式「八景もの」に由来します。日本では近江八景、江戸八景などが有名ですが、当時定番の東京八景があったわけではありません。

国木田独歩の「武蔵野」にある「東京は必ず武蔵野から抹殺せねばならぬ」という宣言は、地図の上では武蔵野の一部である東京も、イメージとしては武蔵野らしさとは相容れないとするものでした。それを知らながら東京を主人公に仕立てた上で、「武蔵野の夕陽」を東京八景の第一としたところに太宰らしい挑戦とユニークさがあります。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「武蔵野文化を学ぶ人のために」

2009年に武蔵野市の寄付講座を企画する機会があり、21世紀の武蔵野学を武蔵野大学から発信しました。その時の成果を編んだ論集が本書です。古代から現代までの武蔵野の記憶とその表象を俎上に載せて、市民と共に近代日本と東京を捉え直すことを目指しています。小稿「太宰治の武蔵野」も収録しています。



(土屋忍編、世界思想社)